
バディーズ フォーエバー！！

絵爾久万

金曜日のこんな時間帯に、優先席を必要とする人は少ないのだけれど、優先席に座るとなんだか気がひける。

そりゃあ、目の前に足元のおぼつかない老人や、松葉杖をついた人、エクスペクティング・マザーが立てば、席を替わってあげる心の準備はいつでもできています。

気がつけばの話だけど……。

そんな訳で、優先席に座るときはいつも、うつむき加減に座ってしまう。

そう、あの日もそうでした。

すごく、疲れていたんです。仕事が立ち仕事だから。その日は成人の日で、朝は7時から夜9時までガッツリ働きました。

12時間タチツパだったから膝から下はもうパンパンで、針なんか刺されたら、針先が折れ曲がってしまうくらいでした。

しかも、重たい荷物だつて持っていました。ネイル・アートの道具一揃い、カット用シザー、メイクアップ化粧品……etc.

お店では自由に使わせてもらえないから、自分専用のやつをいつも持ち歩いているんです。見習いだから仕方ないんです。美容師です。

なんじゃ、ぐおりゃあ？

まず、眼に入ったのはヒョウ柄のぴつたりフィットしたヒールの高いタイトなブーツ。なかなかお眼にかかれない代物。

私の目の前に立った。とりあえずこのブーツじゃ、席を替わる必要はないだろう。一安心。

膝上の紫色のスカート。ジョーゼットの不揃いの裾と、ヒョウ柄のブーツの間から骨ばった膝小僧が覗いている。間違いなく二十代

の膝小僧ではない。

「そう、だから……。最初はね。あれ、ローン組んでさあ……。そんなに高額じゃないから、いいかなって」

お水系独特のかすれ声。こういう声出す人に限って声量もある。

「へえ……」

「足つきのやつは、高いよ。でも、使いやすいしね」

「ああ……」

「台の上とか載せて使えば安定感もあるし……。あれも大きいし」

「あれって？」

「あれ。ほら、あの、入れる所」

「ああ」

「そうそう……。入れてもいいし、入れなくてもいいし、付属のもの付け替えれば、直接入れなくても、表面撫でるだけでも、かなり気持ちいいよ」

「やばいんじゃない？それ」

「千賀ちゃんも使ってるって、言ってた。バスケやってんじゃない？あのこ。あのこったってもう40過ぎてるけどね。ガハハハ……」

「……」

「普段、なーんにもしない人だからね。あの家は旦那が買ってやつたらしいよ。いい旦那だよ。私もローンまだ残ってるんだけどね。」

「……」

「いいじゃん、別に」

「まあね。それより、あれ持ってきた？」

「持ってきたよ。あたりまえじゃん」

ヒョウ柄ブーツの隣りには、紺のプリーツスカートからスラッと伸びた生足が2本。今時珍しい膝丈だ。大きなバッグを肩に担いでいる。

これは高校生？この2人……。親子？そんな感じではない。なんとなくだけど。それにいつたいあれって何？

私は2人の足元を見ながら、更に会話に耳を傾けた。

「はぁ・・・」

高校生が、深い溜息をついた。

「でも、まあ30万くらいだから。後、2回位かな？残りは」

ドアが開き、乗客が降りて行くと、入れ替わりに外の冷たい空気が車内に立ち込めた。

「はぁ・・・、いい風。もう、なんか春の匂いがするよ」

「効果はかなりあると思うよ。高いからね、やっぱり。目尻の小じわが減ったもんね。ほら、こんとこ・・・」

ちらっと見上げる。派手な化粧をした中年の女。茶髪の巻き毛。

まさにヒョウ柄のブーツにお似合いの顔。

地黒のたるんだ肌に塗った白いファンデーションが、地肌の汚さを更に強調している。上唇の縦ジワの間に、粉がよりになって埋め込まれている。

更に悪いことにヒゲの処理をしていない。口紅は黒さを引き立てる、明るいオレンジ。最悪だ。

高校生は、隣りの女の話には全く興味を示さず、手櫛で長い髪をサツと梳き、つり革を持つ腕に顎を載せ

「その前知らないからね」

言葉少なに答えた。なんて愛想のない子なんだろう。

今時珍しい長い黒髪。蒼白な顔に唇の赤みが際立っている。今時珍しく手入れをしていない、きりりとした凛々しい形のいい太い肩めっちゃ美人だ。

「でも、年よりは若く見えるでしょ？」

「年も知らないし・・・」

「あら、そうだった？ふふ・・・」

「ところで桜子さんって、いったいいくつなの？」

「それにしたって春はまだでしょう？」

「ふう・・・」

高校生はつり革に持たれて、物憂げにため息をついた。

「はぁ・・・」

それに合わせて、ヒョウ柄ブーツの桜子という女も溜息をついた。

「はぁ・・・」

つられたように、私も小さく溜息をついた。

2月は忙しいんだ。仕事も忙しいし、昇格試験の論文も仕上げなきゃならないし。会ってる暇なんてないよ。

今度いつ会える？って聞いたら、ひろりんが言った。

別れ際にキスをしようとしたら、グロスがつくからやめろよって。

忙しい、忙しいって。会いたければ、好きだったら、無理にでも時間作って会えるはずじゃない。

好きじゃないんだな。私のこと。まあ、それは最初からわかってるけれど。自分の都合のいい時だけ、相手をしてくれればいいだけなんだよ・・・。

でも、私は気まぐれなひろりんのために、週末はいつも空けておく。だって、いつ、ひろりんから明日会える？って突然メールが来るかもしれないから。

でも、もしそう言われたとしても、私はうん。だなんてすぐには言わない。絶対言わないつもり。

そんな、いつでもほいほい付いていくような、安っぽい女だって思われたくはないから。

そう思っていたら、昨日メールが来た。

明日会おうって。明日は仕事忙しいから会えないって言ったら、

バディーズ フォーエバー！！

じゃ、もう当分会えないかもって言うもんだから、そのまま断つたら、もう、本当に一生会えないような気がして、こんなに疲れてるのに、こんなに重たい荷物持ってるのに、私は今、ひろりんの家に向かっている。

バカだな私って。

ああ、ほんとに、なんだか春の気配。物憂げな振りして、意外と感性鋭いのか。

高校生のくせに・・・

つづく

「それにしても、高校生の悠麻ちゃんと、こんな形でお友達になるとはね」

「お友達？」

「でしょ？」

「バディ・・・」

「バディ？何よそれ？私がナイス・バディーだって？」

「仲間。友達より結びつきが強いんだよ」

「仲間？バディーか・・・なんだかい感じね」

桜子さんは嬉しそうに微笑んだ。

「バディーズ・フォーエバー！」

高校生の悠麻ちゃんはそう言っつて、拳を握り肘を折り曲げると桜子さんの目の前に差し出した。

「バ、バディーズ・フォーエバー！」

桜子さんも見よう見真似で拳を作り、悠麻ちゃんの前差し出した。2人の肘は、力強く交差した。

…なんだよう。この2人の燃え上がる闘志は。まるでこれから戦に出かける戦士じゃないか。

「あーん、重てえやこいつ・・・」

「何も、そんなもの持ち歩かなくなつて」

「一生に一度の真剣勝負だ。生半可な決意じゃないからね」

「それりや、そうだけど・・・一生に一度の真剣勝負、ずいぶん早くきちやつたわね。高校生だつてのに・・・」

「あれ？桜子さん。何言つてるの？まさか、決意鈍つたんじゃないだろうね」

「そんなわけはないわよ。私だって、まだローンの残ってる美顔器
持ってきてるんだから」

いったい何を始めるんだろ？この2人・・・

ああ、やっぱり帰ろうかな。このままひろりの家に行っただって、
やることはひとつ。明日は、土曜日。ひろりは休みだけど、私は
明日も仕事。

朝方までセックスして、セックスして、セックスしまくって、ど
ろどろになって私は寝不足のまま、また重たい荷物を持って出勤だ。
そう、私は絶倫ひろりの欲求を満たしてやるだけの女。

ひろりは精神的な繋がり、たとえば愛だとか、癒しだとか、そ
んなものを私に求めやしない。決して求めやしない。

休みの日に2人で遊園地行ったり、映画みたり、買い物したり、
ドライブしたり、お日様の下で、そんな普通の恋人同士のような付
き合いがしたいんだ。

でも、ひろりが私に会ってくれるのは夜だけ。そして、ひろり
んが私に要求するのはセックスだけ。

私はベッドの上で一晩ひろりのオモチャになる。ひろりんが、
卑猥な言葉を吐けと言えば、私はえげつない言葉をいくらでも吐く
し、ひろりんがえげつない行為を要求すれば私はいつだってそれに
応じる。髪を掴まれ激しい前後運動にも堪え、オエツってなっ
って、涙が出たって・・・。

動物にだつてなるし、お惣菜にだつてなる。年末のパーティーの
後呼ばれたときは、残りのオードブルを身体中に飾られ、ワインを
ジャブジャブ掛けられた。

私がひろりに夢中だつてこと、ひろりん良く知ってるから、あ
いつはいつも上位にたつて私に命令する。それがいやなら帰れつて
でも、私はそんなひろりんが大好き！冷たくされれば、されるほ
ど燃え上がるつてもんよ。一晩だけでも、ベッドの中のひろりんは
ステキで、私を思い切り愛してくれる。一晩だけの擬似的恋愛ごっ

こ。私はその一晩に命をかける。

「あんたがさ、スーパーヤマニの喫煙室で、見覚えのあるライター使って火を点けたの見て、そりゃもうびっくりしたわよ。日本には数本しか輸入されていないグルジアのレア物だもん。しかも名前入りよ。私があいつにプレゼントしたやつだっけすぐにはわかったわよ。バカみたいが高かったんだから。美顔器なんかと比べ物にならないわ。まだ、ローンだっけ残ってるんだから」

「はは・・・バカじゃん」

「人のこと言えないでしょ？」

「お金は使ってない」

「あんたまだ若いからね。そのうちわかるわよ」

「わかりたくないね」

「あんたの30年後、見てみたいもんだわ」

「30年後？生きてる？ギャハハハ・・・」

「失礼しちゃうわね。生きてるわよ！ネットに公開されちゃった、あんたの透けパン姿は永遠に残るでしょうけどね」

「消させたよ。あたしの目の前で・・・、チツクシヨー！！」

「Web上で一旦公開されたら終わりよ。誰が何処で保存してるかわかりやしないでしょ。あの元イケイケ女優のAVだっけ、未だに売られてるわよ。もう、20年は経ってるっていうのに。あんたのだっけ平成史の美少女名鑑なんてのに載せられたりしてね。フッフ・

・・・

「やめてようっ！」

悠麻ちゃんはひどく興奮し、両手で耳を塞ぎ、その場にしゃがみこんだ。肩に抱えていた大きなバッグが、ボタンと倒れた。

向かい側に座り、さっきから大きな音を立てて、ガムをクチャクチャ噛んでいた男の頭を直撃した。

いい気味だ。

私は思った。

桜子さんが急いでバッグを拾い上げ、男に謝った。見た目は派手だが意外と、情の深い人なのかもしれない。

男は眉間にシワを寄せ、無言で更に大きな音を立て、ガムをクチャクチャさせた。眉の濃い、顔のでかい男を見ていたら、悪いのはこの男ではないのだが、殴りたくなるほど無償に腹がたつた。

「ほら悠麻ちゃん。立ちなよ。今からそんな弱気でどうするの？その怒りを向ける相手は私じゃないだろ！」

「別に・・・」

悠麻ちゃんはすつと立ち上がり、またバッグを抱えた。

「別に弱気になんてなっていないよ」

「わかるわよ。あなたの気持ち、あなたの年頃じゃ、あんなことされたら死にたくなるさ。あんた生きてるだけでもえらいよ」

「・・・」

「あたしはさ、言いたかないけどさ・・・」

「言わなくていいよ」

悠麻ちゃんが言った。

「ワニ・・・ってさ。言われたときは愕然としたよ。別に容姿のことと言われるのはかまわないけどさ。ワニって何？両生類？」

「爬虫類」

「まだ、ダチヨウって言われた方がよかったわよ！」

「ダチヨウ？あははは・・・」

「皮剥いでなめしてバッグ作ってやろうかって、あの最中に言わなかつたって、うつろう・・・」

桜子さんが泣き始めた。

「やめなよっ！！」

悠麻ちゃんが大きな声で叫んだ。周りの乗客が2人に注目した。それから2人は黙り込んだ。

どうやら2人の会話の概要がなんとなくつかめてきた。2人の間には同一の男が介在しているらしい。

その男が高校生と中年女の両方に致命的な屈辱を与えたらしい。高校生から中年女まで相手にするなんて。ずいぶん許容範囲の広い男だ。

いきなり腿が振動音を捕らえた。コートの右ポケットから、携帯を取り出し、受信トレイを開いてみる。

ひろりん

Re:Re:Re:Re:Re:ひろりん

やっぱさあ、今日取りやめ。

帰っていいよ。

なんか、疲れちゃってもうだめなり。

寝るぽ。

ガガーーーーー！！！！

たった4行の文字の羅列・・・

たった4行の文字の羅列が、こんなに人を狂わせる事ができるなんて。私の身体は怒りのためガタガタ震え出した。

自分から呼び出しておいて。私が仕事終わって、そっちに向かうっていうメールだって送ってるのに、取りやめ、帰っていいって・・・。いったいあいつの神経どうなってるんだ。

私のこと、出張風俗嬢かなんかと勘違いしてやしないかい？私の心は煮え繰り返った。

目の前の2人の女を怒らせた男も、大股広げ無駄にガム噛む男も、私を悩ますひろりんも、世の中には害虫が多すぎる。

熊谷あゝ熊谷。

次はあ、熊谷でえゝす

車内アナウンスが流れた。

「着いたよ。降りるよ」

ヒョウ柄の桜子さんが、ドスの聞いた声で言った。
号令をかけられたように、悠麻ちゃんが姿勢を正した。

もうすっきり2人の会話に入り込み、影響を受け過ぎてしまった
私は一緒に降りる以外に方法はなかった。

ひろりにフラれ、行き場を失った私は、重たい荷物を抱え2人
の後に続いて、よろよろと電車を降りた。

つづく

…そうだ！本当は私も此処で降りる筈だったんだ。

駅を出て、初めて気がついた。今となっては目的は違うけど、私はもう2人を見捨てる事ができなかった。

2人は駅ビルを出ると、国道方向に歩いて行った。国道に出ると右へ曲がりファミレスに入った。

ガラス越しに2人の座り位置を確認した。2人は窓側の席に着いた。暫く時間をおいて、私も店に入った。

入り口で店員に、お1人様ですか？と聞かれ、はい。と答えるとカウンター席でよろしいでしょうか？と言うので、私は、窓側をお願いしますと言った。

丁度、運良く2人の隣りの席が空いていた。

私は2人の席が見える方向に腰掛けた。桜子さんが私に背を向け、テーブルを挟んで、向かい側に悠麻ちゃんが座っている。

私と桜子さんと悠麻ちゃんは、同じ直線状に位置していた。つまり皆既月食状態だ。悠麻ちゃんから私は死角になるし、私がちよつと身体を動かせば悠麻ちゃんの動きもよく見ることができた。

2人は和風ハンバーグステーキセットを注文した。私も同じものにした。真似したわけではない。こういう緊迫した状況で、身体が肉を求めているのだろう。ドリンクバーは頼まなかった。

「あんだ、ところで、あいつの家の鍵持ってるの？」

桜子さんの声は、太く音量があるので後ろを向いていても、よく聞こえた。

「ない・・・」

「じゃ、どうやって入るのよ？あたしはご招待受けたことないんでね」

「鍵なんかなくても大丈夫。裏に回って窓から進入するんだよ。サツシの鍵壊れてるから、入れるんよ。古い木造家屋にひとり住まいだからさ。両親死んでるし。ペスっていう老犬一匹いるけど、私になついているから大丈夫」

「いなかったらどうする？」

「待つっきゃないだろ。ここまで来たんだ。何怖じけ付いてるんだよ！今になって」

「怖気づいちゃいけないけどさ、もし、彼女としっぽり濡れてたらどないする？」

「ヒロキの事だ！！その、可能性は高い。尚更闘志が沸くつてもんだよ。ふたり同時に逝かせてやるさ」

な、なに？ヒロキ？ヒロキって……。心臓が口から跳びだしそうだった。

ヒロキって、もしかして、あの、私のひろりん？ひろりんはヒロキだよ。そんなあ……。そんな事ってある？そんな偶然ってあるの？

うそ！たまたま、名前が一緒なだけでしょ？ヒロキなんてどこにでも転がっている名前だし。

でも、ここ熊谷だし、ひろりんの家近いし。古い木造家屋にひとり住まい。寝たきりの老犬もいた。

1階のサツシの鍵が壊れているのは知らなかった。両親死んでることも。私より高校生の悠麻ちゃんの方が詳しいじゃん。それはかなりシヨックだ。

「じゃ、準備してくるから！」

ハンバーグを食べ終わると、悠麻ちゃんはそう言って席を立った。悠麻ちゃんは私のテーブルの脇を通り、トイレへ向かった。戻っ

てきたとき、私と目を合わす可能性がある。

でも、あのふたりほとんど自分たちだけの世界に入り込んでから、多分気付きはしないだろう。悠麻ちゃんはなかなか戻ってこなかった。

桜子さんはタバコに火を点け、ゆっくりと煙を燻らせた。

だけど、さつきからの2人の会話、ひろりんならありえない事はない。いや、99パーセントありえる。ふたり一緒に逝かせてやるって意気込んだ。

逝かせてやるって……。殺っちゃうってこと？まさか……。

でも、あのふたりなら何するかわからない。

私がひろりんの家に行ってたら……。

ふたり一緒に逝かせてやるって、もしかして、ふたりの内のひとは私になつてたって事？

身震いがした。

ひろりんと2人で昇天？そんなのいやだ！それほど愛してはいない。あんな、私を虫けらのように扱う男、命かけて愛する価値はない。それはわかっている。

今日だって、こんな熊谷くんたりまで呼び出しておいて、重たい荷物抱えてへとへとになって、やっと会いに来てやったっていうのに。帰っていいって。ひどすぎる。

あんな男、いつその事、殺っちゃった方がいいのかもしれない……。

そつだ！あんな害虫、駆除するべきなんだ。

私はハンバグの最後の一切れを、口の中に放り込んだ。勢いあまってガツンとフォークをまで齧ってしまった。何故か無償に腹が立ってきて、私はナイフとフォークを両手に持ったまま、テーブルを思いつき叩いた。

桜子さんがチラッと後ろを振り返った。

トイレから悠麻ちゃんが戻って来た。袴を履き、額に鉢巻きを巻いている。肩には大きな弓を抱え、大股で颯爽と歩いてくる。まるで、これから獲物を捕らえに行く果敢な志士だ。私はその凛々しい姿に性別を超えて見惚れた。

「悠麻ちゃんの弓道着姿、初めて見たけど勇ましいね。ぐぐっとき
ちやうよ」

「いさぎよく生きるのが、真のサムライってもんだよ」

「あんた、いつからサムライになったのさ？」

「姿形は卑しい女だけれど、俺は生まれた時からサムライさ」

悠麻ちゃんは言った。

桜子さんの、タバコを持つ手から灰が落ちた。

ついて行こう！あんな害虫駆除するべきだ！

私は隣りの席へ行き、ふたりの前にひざまずいて言った。

「お供させてください！」

「あんた誰？」

悠麻ちゃんは訝しげに私を見た。

「電車の中からずっと一緒に頂きました」

「あっ、この人電車の中で、私達の前に座ってた人」

桜子さんが思い出してくれた。

「おふたりの話は最初からずっと聞かせて頂きました。偶然にも目的は一緒なんです」

私は今日ひろりんと会う約束をしていた事は、言わなかった。この場の雰囲気では、私が射止められてしまうとも限らない。

バディーズ フォーエバー！！

「まさか……。あんたも？」

「はい」

「して武器は？」

悠麻ちゃんの目付きは、もうたんなる普通の高校生のものではなかった。

「ここに持ってます。シザーとコームとヘアピンとネイル。商売道具ですけどね」

「そんなもんで。やれるのか？」

「りっぱな凶器です」

「ハサミとヘアピンか。なるほど、使いようによっては……」

「ところで、あんたはあの男にいったい何をされたっていうんだい？」

私の顔を覗き込む、桜子さんを制するように、悠麻ちゃんと言った。

「いや！事情は今さら聞く必要はないだろう。私たちの話を聞いているなら、真の目的は心得ているのだろうな」

「もちろんです。今、標的も間違はなく合致しました」

「よし！それでは仲間に加えてやろう」

「ありがとうございます！」

「仲間がひとり増えれば、ますます心強いじゃないの」
桜子さんが嬉しそうに言った。

悠麻ちゃんが拳を握った。桜子さんもそれに習った。私も見よう見真似で拳を握った。

「バディーズ フォーエバー！！」

「バディーズ フォーエバー！！」

「バディーズ フォーエバー！！」

バディーズ フォーエバー！！

拳を握った3人の腕は、真中で力強く重なり合った。

続く

高校生の悠麻ちゃんを筆頭に、桜子さんと私の3人はひろりんの家を目指して、迷う事なく国道17号を北上した。勝手知ったる熊谷だ。

弓道着姿の凜々しい悠麻ちゃんが、鬼征伐に向かう桃太郎なら、その後続く桜子さんは雉、私は猿と言ったところだろうか。犬は使い物にならない老犬ペスがいる。

途中、悠麻ちゃんがきび団子の代わりに、熊谷名物【御家宝】を買った。

ひろりんの家に到着すると、悠麻ちゃんはまず犬小屋に挨拶に向かった。中をのぞき込むと、暗い小屋の中で毛並みの荒いやせ細った犬が倒れていた。

悪臭を放っていた。何かが腐敗したような、いやな臭いだった。すでに死んでいるようだった。

「ペス・・・」

悠麻ちゃんが呼ぶと、犬小屋の中から老犬ペスがヨロヨロと這い出してきた、嬉しそうに尻尾を振った。死んではいなかった。

「元気だったか？今日はお前の大好物を持ってきたぞ」

御家宝をやると、ペスは老犬のくせにガツガツと食べはじめた。「普段、ろくな物食わせてもらってないからな。虐待され、こんな寒いのに家にも入れてもらえず、お前可愛そうになあ・・・」

御家宝を食べ終わると、悠麻ちゃんは腐敗臭、いや死臭のする犬を抱き上げた。つやの無い毛がごっそりと抜け落ちた。気味が悪くて後ずさりする私と桜子さんに、悠麻ちゃんはついて来いと、目配

せした。

それから私達は裏庭に周り、打ち合わせ通り窓から順序よくひろりんの家に侵入した。

第一関門は難無く突破した。

ファミレスで悠麻ちゃんが、詳しい見取り図を書き、侵入経路を説明してくれたのだ。

悠麻ちゃんは、ひろりんの家の構造に付いては、かなり詳しく把握していた。

家出していた時に、一ヶ月間ひろりんの家でお世話になったらしい。

両親医者のお悠麻ちゃんは、家業を継ぐべく英才教育を受けたいが、悠麻ちゃんの希望は医者になることではなかった。

悠麻ちゃんの希望は、立派な戦士になることだった。

悠麻ちゃんは高校を卒業したら、NPO軍隊に入隊することを望んだが、両親の猛反対を受けたのだ。

そこで悠麻ちゃんは、元々メル友だったひろりに相談を持ちかけた。両親とは決別したいと言う悠麻ちゃんに、ひろりは自分の家で暫く暮らせばいいと話を持ちかけたのだった。

そこで悠麻ちゃんは、屈辱的な体験をしたのだという。詳細は話してはくれなかったが、ある日ひろりのパソコンのお気に入りフォルダーを開き、素人投稿作品の中に、自分のパンチラの寝姿や制服姿、入浴シーンなどが満載の画像を見てしまったのだ。

悠麻ちゃんはひろりんとは、一度も男女の関係は持たなかった。それらは全て盗み撮りだったのだ。

結局、悠麻ちゃんは両親の元に戻りはしたが、ひろりんへの恨みは一生消せないものとなった。一生消せないものなら、ひろりんを

消す以外に方法はないと、彼女なりに決断したのであった。

その後、私達は一階に処刑場のセッティングをした。

桜子さんは、美顔器をリビングのテーブルの上に置いた。私はその周りに、シザー、コーム、ヘアピン、メイクアップ用品、ネイルの類をセッティングした。

悠麻ちゃんは弓と矢を部屋の隅に立て掛けた。それから通学バッグから茶色い瓶を取りだし、瓶の中の液体を美顔器の中にどぼどぼと注いだ。

鼻を突く異様な臭いがした。茶色い瓶にはH₂SO₄と書かれた紙のシールが貼ってあった。

「やっぱり女がいるわ・・・」

桜子さんが、ソファアの上に置かれたコーチのバッグを指さして、声をひそめて言った。

テーブルの上にはワインボトルが1本と、飲みかけのグラスが2つ。

「うーん、ここで2人は数時間前しばらく会話をし、2階へ上がっていった。相手は成金趣味のキャバ嬢か！田舎物め・・・」

悠麻ちゃんは、テーブルの上を指差して探偵のように言った。

身代わりだ。

私はそのキャバ嬢に心の中で感謝した。

「現在、午前2時ジャスト！よし！決行しよう！」

準備が整うと悠麻ちゃんの合図で、私たちは足音を立てずに二階へ通じる階段を上っていった。

築40年の古い木造家屋であるから、部屋のドアはぴたりと閉ま

らない。先頭の悠麻ちゃんはそこるところしつかり把握しているから、ドアをそーっと押すだけで、音を立てずに寝室に侵入した。入り口で後ろを振り返り、私たちに中に入れと合図をした。

寝室と言っても、二階は四畳半と六畳のふた間だが、真ん中の襖は取り外され、大きなダブルサイズのウォーターベッドが中央に置かれている。

部屋に入ると、最初にベッドが眼に入った。続いて間抜けなひろりの寝姿。隣りにはコーチのバッグの持ち主。

窓から差し込む仄かな月灯りが、布団からはみ出したむっちりとした女の太腿を浮き上がらせていた。

ベッドの上でひろりとプレイするときは、いつもふたりだけだった。いつもふたりだけだった部屋に、今、私と悠麻ちゃんと桜子さんの3人とひろりと、ひろりの隣りにはひろりの女。なんだから不思議な光景だった。

悠麻ちゃんは、迷うことなくベッドに近づいた。

私と桜子さんは打ち合わせ通り、悠麻ちゃんの両脇に着いた。3人は女を取り囲む形になった。ゆっくりと、女に掛かっている布団をはがした。

私たちは同時に、ベッドの上で眠っている女を暗がりの中で観察した。特別取り立てて述べる程もない、普通の女だ。

なんで、今夜ひろりんは私の代わりに、こんな普通の女を選んだのだろうか・・・。

自分で言うのもなんだけど、こんな女より、私の方が明らかに魅力的だ。私は不思議に思った。

しかし、暗闇の中で眼を凝らして見ると、女は黒の編みタイツに、ガーターベルトをつけていた。上半身は黒い編み上げのキャミ。はちきれそうな乳房が、半分はみ出している。引き締まったウエスト。蜂に刺されたようにパンパンに腫れたおしり。当然、右手には鞭を握っていた。

ひろりんとは様々なプレイを試みたが、SMごっこは未開の地だった。この女に、新境地を開拓されたのだろうか。。。そうに違いない。

でも、一步間違えば、私がここに寝て、悠麻ちゃんと、桜子さんの標的になっていたかもしれないのだ。ああ、恐ろしや・・・。

SM嬢は殺気を感じたのか、眼を開けた、私たちの顔を確認すると、女の顔は恐怖に慄いた。声を上げようとした瞬間、悠麻ちゃんが女の口をガムテープで塞いだ。ほぼ同時に私は両足、桜子さんが両手を強く押さえつけた。

女は声も出せず、微動だにできなくなった。

隣りでひろりんは呑気に、いびきをかいて熟睡していた。一旦眠りに落ちると、ひろりんはよっぽどのがない起きない。

次に女を立たせ、まずガムテープで両手を後ろで、ぐるぐる巻きにした。その後階下の居間に運びソファーに座らせると、SM嬢姿の女は身体を擦じらせて抵抗したが、容赦なく両足をぐるぐる巻きにした。

事前にファミレスで、とことんシュミレーションしたので、無駄なく効率的に事は運んだ。

さすがNPO軍隊希望するだけのことはある。きちんとしたストラテジーを持っている。高校生のくせに、あなどれない。

次はひろりんだ。

その前に、私は桜子さんにメイクを施した。特殊メイクだ。桜子さんには顔をクシャクシャにしてみたい、パールの効いた白いファンデーションを分厚く塗った。

顔を元に戻してもらつと、深いシワが更に深くなり、凹凸がくつきりとなった。唇には赤色No.1の口紅を耳の方まで塗ってやつ

た。

シャドーはブルーで眼の下まで真っ青に塗ってやった。最後にアイブロー・ペンシルで、ドットを沢山書き加えた。

特殊メイクの経験はなかったが、自分ながらに最高の出来栄だと思った。

準備が済むと私たち3人は、コーチのバッグの女を居間に残し、また二階へと昇って行った。

老犬ペスが見張り役だった。

続く

ウォーターベッドの上では、花粉症のひろりんが大いびきをかいて、眠っていた。

まず、私と悠麻ちゃんが両側にまわり、ゆっくりと布団をはがしにかかった。ひろりんは、生まれたままの姿で眠っていた。

桜子さんは、それを見て不覚にも発情してしまったようで、ひろりんの中心の突起物をいきなり掴んだ。計画外の行動だった。

ひろりんは、夢の中でSM嬢に触られているとも思ったのか、桜子さんの手に、自分の両手を重ね、前後に動かしはじめた。

桜子さんはそれに合わせて、いとおしそうな顔をした。ひろりんは無意識のうちに腰を動かし、小犬のように、くうくん・・・と鳴いた。

桜子さんがひろりに始めてあったのは、気仙沼漁港の近くのとる場末の酒場であった。

ちょうどその頃、ひろりんの勤める会社で、秋刀魚の缶詰工場を立ち上げる事になり、ひろりんは現場主任として気仙沼に暫く赴任していたのだ。

そんな時、現地の職員に連れて行ってもらったのが、桜子さんの経営する

『さくら』という飲み屋だった。

桜子さんは以外にも料理が上手で、桜子さんの作る、お袋の味の惣菜や、現地の新鮮な魚貝を使った料理は地元でも大変人気だったらしい。

数年前に、母親を亡くしたひろりんもまた、桜子さんの手料理に

夢中になった。たまたま母親と同郷だったからかもしれない、桜子さんの作るお袋の味は懐かしい母の味だった。それは、ひろりんの心を掴んだ。

気仙沼赴任中は、毎日のように通って来たらしい。そこでひろりんは桜子さんと懇意の仲になり、あるときベロンベロンに酔っ払ったひろりんを手厚く介抱をしてるうちに、一線を越え男女の仲になっってしまったのだという。

その年齢差26才ということだ。

熊谷から遠く離れた気仙沼で、寂しさも手伝ったのかもしれない。若さゆえ欲望のままに関係は結んだが、ひろりんは事が済むと人格が変わったように暴力的になり、毎回桜子さんを罵り、殴ったという。

若く逞しい、ひろりんの持ち物に虜になってしまった桜子さんは、痣だらけになったが、どうすることもできなかった。そして、ひろりんの胃袋もまた、桜子さんの造るお袋の味に虜になっていた。ふたりは別れるに別れられず、泥沼にずぶずぶとのめり込んで行ったのだった。

缶詰工場が完成し、ひろりんが熊谷に帰る時が、縁の切れ目だった。ひろりんは腐れ縁に終止符を打つ覚悟だった。

しかし、50半ばで狂い咲いてしまった、桜子さんはそれで終わりにすることはできなかった。ああ、哀しい女のサガ。

桜子さんはひろりんの帰熊と同時に店を閉じ、後を追ってきたのであった。

しかし、熊谷へ戻ったひろりんは決して桜子さんには会おうとしなかった。桜子さんは大宮でアパートを借り、スーパーヤマニのレ

ジで働きながら、ひろりんへの想いを募らせる辛く哀しい日々を送っていた。

ひろりんへの想いが断ち切れないのなら、いつそ、ひろりんを殺すきしやないとまで思い詰めたのであった。そんな時悠麻ちゃんと運命的な出会いをしたのだった。

「やめるー！！」

ひろりんの突起物を啜えようとした、桜子さんの頭を悠麻ちゃんが叩いて叱咤した。

桜子さんは耳まで裂けた紅い唇を歪ませてニヤツと笑った。斜めから差すぼんやりとした月光りで、目尻の深いシワが、いつそう浮き立った。

身震いがした。まるで、地獄絵巻の脱衣婆のようだった。

その後、桜子さんは打ち合わせ通りひろりんの上に跨った。ようやくひろりんが眼を覚ました。

「ウワァー！！！！」

ひろりんは、身体の上に押し掛かっている桜子さんを見て、大声を揚げた。

魔物に、憑依かれたとも思ったのだろう。ひろりんは眼をむき出し、何も抵抗できず金縛り状態になった。それも計画通りだ。

ひろりんが怯んで動けなくなったところで、私と悠麻ちゃんはひろりんの両腕を掴み、頭の上で素早くぐるぐる巻きにした。

「何するんだっ！！！！」

「はっはっはっは……。やっとお目覚めかい？」

「お、お前・・・」

「覚えていてくれたのかい？ありがたいねえ・・・」

桜子さんは、ひろりんの上に跨ったまま、両手で全身を撫でまわした。

「やめろうー！ーっ！！！化け物！！」

怒った桜子さんは、ひろりんの股間を思いっきり握った。

「ウワァー！ーっ！！！！」

ひろりんは大声を出したが両腕はすでに縛られ、身体の上には妖怪が載っていたので、身動きができなかった。

「今から、楽しいゴツコしようねえ。今日はひろりんが私の言いなりになるんだよ」

「か、かおりん？・・・」

ひろりんが私の顔を見て言った。

「この、邪悪な害虫め！浄化してくれる！」

悠麻ちゃんが言った。

「悠麻ちゃんまで・・・。ああ、俺は悪い夢でも見ているのか・・・」

「夢じゃないんだよ」

脱衣婆の真つ赤な唇が耳まで裂けた。

続く

それから、私たちは抵抗する丸裸のひろりんを、階下まで連れて行きました。それは、容易な事ではありませんでした。身長187センチ56キロの、やせ細ったひろりんでしたが、やはり男の力はすごいものでした。

「オラオラ降りろよう！脚ついてんだろお！」

階段の踊り場で、抵抗して動こうとしないひろりに、桜子さんが低いドスの聞いた声で言いました。

「ざけんなよ！ばばあ！」

ひろりんが、桜子さんに脚蹴りを入れました。

「うわぁー！っ！！！！」

バランスを崩した桜子さんは、そのまま階段をずり落ちましたが、溺れる者は藁をもつかむ、ひろりんの股間の突起物をつかみ、なんとか一命を取り留めました。

「やめろーっ！離せ！妖怪！」

ひろりんが言いました。

「ふんっ！サイズが大きいからっつて、いい気になるなよ」

桜子さんは、何かまだこだわっているようでした。

階下に下り、ソファアの上に縛られたSM嬢の姿を見て、ひろりんは

「タマミ・・・」

と呼びました。

タマミは助けを求める必死な眼差しで、ひろりんを見つめ返しま

した。

私たちは見詰め合う2人を引き剥がすように、まず、ひろりんを美顔器の前に連れて行きました。

「てめえら、いったい何しようつてんだよ。揃いも揃って。えーっ？オレがお情けかけてやったつていうのによ。恩を仇で返すつもりかい？ざけんなよ、てめえら！！」

「あんたが私たちに与えた屈辱を、何十倍にもして返してやるのさ」桜子さんが言いました。

「お前みたいな不気味な妖怪相手にするのも、勇気のいる事なんだから。俺はもともとボランティア精神旺盛なもんでね」

「なにをー！ー！！貴様」

「やめな！こんな最低な男に、今さら腹を立てても仕方がない」

悠麻ちゃんが、怒り狂う桜子さんを、なだめるように言いました。

「悠麻。お前だって、感謝されてこそ、恨まれる覚えはないぜ。自ら救いを求めて俺の所へ逃げ込んで来たんだろ？」

「無断で投稿しやがって！！」

「へえ……。でも、本当はうれしかったんだろ？知らない振りして盗み撮りされるの」

「やめてー！ー！ー！え！！！！」

悠麻ちゃんは頭を抱え、その場にしゃがみ込みました。

「悠麻ちゃん・・・あんたこそ」

今度は私が、悠麻ちゃんをなだめました。

「かおりん、お前だってそうだけ。はっきり言ってお前みたいなタイプぜんぜん好みじゃねえし。お前が泣きついて、離れたくない・・・なんて言うもんだから。お情けかけてやったつてのに」

「ひ、ひどい。そんな言い方しなくたって」

「だって、そうだろ？恨まれる筋合いはないぜ」

「じゃ、ひとつだけ聞いわ。あの女の何処がいいの？」

私は隣室のソファアーの上を指差して言いました。

「ははは。ボディーだよ？」

「ボディー？」

確かに、ソファアーので両手両足を縛られているSM嬢は、私たちに無いものを持っていました。

風船をふたつ並べたような胸、キュツと引き締まった腰、パンパンに膨らんだ尻と腿。

桜子さんは本当にワニっぽかったし、悠麻ちゃんはスレンダーだが筋肉質、私はやせっぽち。

「たったそれだけ？心の繋がりはないの」

「心？あはははは・・・そんなの無い方がいいんじゃない？ムチムチな身体にオツパイとオマンコついてりや、なーんもいらぬの」

「バカにしてるわっ！」

「わかった。もうそこまでだ。今日は、あなたにとつてもいいものを持ってきたのよ。ほら美顔器よ。10年前に30万で買ったの。

月々2千8百円の返済だから、まだローンが残っているけどね。かなり古いタイプだけど、スチームパックもできるからここに顔を入れればお肌もつやつや。色男は顔が命でしょ？」

さすが年の功。桜子さんはすっかり冷静を取り戻し、冷酷な顔をして、スチームボタンを押しました。

中の希硫酸からぶくぶく泡が出はじめました。同時に強い刺激臭が発生しました。目が痛くなりました。

「よっしやあー！行くでえー！！」

悠麻ちゃんが気合を入れて、大きな声で言いました。

私がひろりんの後ろで、ガムテープに巻かれた両手を抑えている間に、悠麻ちゃんと桜子さんは、ひろりんの頭を両側から掴みました。

「何するんだ！やめろっ！ー！！！」

顔を液体に近づけて行くと、ひろりんはただ事ではないと思ったのか、身体を大きく揺すり、抵抗しました。

離すものか……。私は渾身の力を込めて、後ろからひろりんの腕を掴みました。

ふたりは両側からひろりんの髪を鷲掴みにし、煮え立つ希硫酸の中にひろりんの顔を押し込みました。

「ぐわっ！！ががががっ……」

その瞬間、電流が流れたようにひろりんの身体はガタガタと痙攣し、すぐに自力で顔を持ち上げました。

後ろからその顔は見えませんでした。ひろりんの顎から白い粘液状のものが、だらだらと滴り落ちました。

悠麻ちゃんと、桜子さんは容赦はしませんでした。

すでに、眼付きが尋常ではありませんでした。多分、私自身もそうだったに違いありません。

ふたりは一旦顔を上げたひろりんの頭を、再度沸騰する硫酸液の中に沈めました。

「ぐわっ！！がらがらがらっ……」

ひろりんは足をバタバタさせ、全身を震わせました。振り飛ばされそうになりましたが、私は背後から身体を抑え、ふたりは後頭部を押さえつけました。

もうその頃になると、私たちはすっかり犯罪者になりきっており、ましたから、何か脳内ではモルフィーネのような物質が、大量に分泌されたのでしょうか。

激情する自分たちの行動に、酔ってさえいたのです。悠麻ちゃんと桜子さん私の3人は、本来持つてる以上の力を発揮する事ができました。

どのくらい、そうしていただしよう。必死で抵抗しようとしていたひろりんの身体が動かなくなりました。

と、一瞬油断した所で、突然ひろりんの頭が跳ね上がりました。

「ぐわっ！！」

同時に美顔器が倒れ、テーブルの上から床の上に落ちました。

硫酸の飛沫がまわりに飛び散りました。桜子さんも悠麻ちゃんも私もひろりんも、皆、床の上に重なって倒れました。私たちも、硫酸液の飛沫を浴びました。

手の甲が酷く痛みました。見るとケロイド状にただれていました。

桜子さんは、右目の下がお岩さんのようにただれ、悠麻ちゃんは唇が腫れあがっていました。

3人が怯んだ隙にひろりんは、助けを求めてタマミのいるソファの方へ這ったまま逃げ出しました。

「ムググググムヤア！！！」

ひろりんの顔を見た、タマミはものすごい形相で、ガムテープ越しに悲鳴をあげ、恐怖のあまり、ひろりんの顔を蹴飛ばしました。そこへ死んだように眠っていたペスが、よろよろと近づいてきて、ひろりんの脛に噛み付きました。

「ぐおりやぁー！！！！」

ペスはひろりんに思い切り蹴飛ばされ、宙を飛び、流し台のレンジの上に置かれた鍋の中に落ちました。ぐったりと死んだように動かなくなりました。

計画外に硫酸の飛沫を浴びた私たちは、次の行動に出ることができず、テーブルのまわりで暫く倒れたままです。

そんな私たちの隙をつき、ひろりんは両手のガムテープを剥がし、立ち上がったかと思うとこちらを振り向きました。

その顔はケロイド状に解け、頬の肉が剥がれ、ぶら下がっており、白い頬骨が見えました。

そして、恐怖にたじろぐ私たちの方へ、ゆっくりと歩いて来ました。その手にはワインのボトルが握られていました。

ひろりんは、おぼつかない足取りで私たちの方へどんどん近づいてきます。眼のまわりの皮も溶けて、どろどろになっていましたので、眼はよくえないようでした。

ボトルを振り上げると、私たち目掛けて突進してきました。

そして、ボトルを思い切り振り下ろすと同時に、3人が倒れている所に、自分も倒れ込んできました。

私たちは瞬時に転がって逃げますが、ちょっとだけ逃げ遅れた桜子さんの頭に、ワインボトルが当たり、グシャッと割れました。

桜子さんは頭からワインを浴び、仰向けに倒れました。周囲に血の海が広がりました。しかし、キズは浅かったようで、またしぶとく立ち上がりました。

さすが年の功、今度は怯むことも無く、そのまま、逃げようとするひろりんの背後から抱きつきました。

そして、悠麻ちゃんに言いました。

「悠麻、今だ！やれいっ！！」

いよいよ、計画実行です。

続く

倒れていた悠麻ちゃんも我に返り、素早く、茶の間の隅に立てかけてあつた弓と矢を取りに走りました。

私も桜子さんの脇に付き、よろけるひろりんを壁に立てかけました。

そして、ふたりで片方ずつ、腕を掴んで上に持ち掲げました。ひろりんは、万歳をした形になりました。

準備がすんで振り返ると、弓を持ち、弦に矢をかけた悠麻ちゃんが勇ましく構えて立っていました。

標的に焦点を定め、大きく弦が引かれました。

弦を離すと、矢が一気に飛翔しました。

「グエツ!!!」

目の前を矢が一瞬にして通り過ぎました。

「あたーーーーりーーーーい!!!!!!」

悠麻ちゃんは、大きな声を張り上げて叫びました。

見ると、矢は押さえていたひろりんの右手の平を貫通し、壁に突き刺さっております。

今度は左腕です。

矢が放たれました。眼に見えぬ速さで突き刺さりました。ブスツと鈍い音がしました。

「ギャーーーー!!!」

桜子さんが、叫びました。

見ると矢は、桜子さんの左耳たぶを貫通しております。手元が

狂ったようでした。やはり、かなりの集中力を要する競技なのでしよう。勇ましくても、やはり高校生。心の動揺が影響したようです。「ごめん……」

悠麻ちゃんは、素直に謝りました。

桜子さんはそのまま、ズズと壁づたいに倒れていきましたが、さすが年の功、自力で矢を引き抜きました。耳たぶが千切れました。そして、その矢をひろりんの左手の平に付き刺し、壁まで貫通させました。

「グワツ！！」

ジーザス！！

ひろりんは壁に貼り付けになりました。

そして、最後に止めの一発です。

三本目の矢は寸分の狂いもなく、ひろりんの心臓に突き刺さりました。

「あたーーーーーりーーーーーい！！！！」

悠麻ちゃんは、大きな声で叫びました。

「グエツ！！」

硫酸で爛れ垂れ下がった、上目蓋の隙間から、ひろりんは白目を剥き出し、口から茶褐色の吐瀉物を滴らせました。

粘性の吐瀉物は口元から、だらだらと途切れることなく、ゆっくりと生き物のように身体を流れて行きました。

「グエーツ！ゴツ！グツグツグツ……グツ……グツ……」

胴体を擦じらせ苦しみもがいた。矢が刺さった左の胸からは血がだらだらと流れました。自力で立っていたひろりんは力なくうな垂れました。

時折、ひろりんの身体は大きく痙攣し、ガクンと揺れ動きました。そのたびに私はドキッとしました。

桜子さんと悠麻ちゃんが、私を見下ろして怖い顔をして立っています。私は泣きながら、ひろりんの頭に、成人式で使ったダチョウの羽を輪っかにし、冠のように載せました。

そのうち、痙攣もおさまりひろりんはうなだれたまま、ぴたりと動かなくなりました。

「逝ったよ・・・」

桜子さんが、ひろりんの頸動脈を指で押さえて言いました。悠麻ちゃんが胸元で十字を切りました。

涙が止めどなく流れて、よく見えませんでした。私にはダチョウの羽の冠を被ったひろりんが、天使のようにも見えました。

最高の作品に仕上げよう・・・。それがせめてもの私からの償い。私はそう思いました。

それから、全身に、ブルーメタリックのスプレーを噴射してやりました。次に、手足の爪には赤いネイルを塗りました。その上から金銀のラメを埋め込みました。

赤や緑や黄色のネイルを、肩から流してやると、胸元や腹部の方にどろどろと滴り落ち、サイケデリックな模様が出来上がりました。そうこうしている内に、私の中で創作意欲がどんどん湧いてきました。成人式で使った、赤と金色の帯ががありました。

股間のうなだれた突起物の根元に巻き、可愛いリボン結びにしてあげました。

「巻きが甘い！」

桜子さんがそれを見て、言いました。私の手を押しつけ、一旦リボン結びを解くと、それを両手の平に載せ、いとおしそうに見つめておりましたが、意を決したように、口元を引きしめ、もう一度帯

×でぎゅつと巻きなおしました。ぎゅつぎゅつと。不思議なことにうなだれていたものが元気よく生き返りました。

「う、う・・・絶倫ひろりん・・・」

桜子さんが呟きました。

その眼つきは、常軌を逸しているようにも見えました。その後、桜子さんは何を思ったのか、シザーを取り上げると、両刃を大きく開き、股間の突起物に、持ってゆきました。

どんなに遅くなっても、どんなに仕事で疲れていても、使ったシザーの刃は、その日の内に必ず磨いておきます。シザーは美容師の命ですから。いつケースから取り出しても切れ味は最高です。

「やめてえーーーーっ!!」

私は叫びました。

「やめろーーーーっ!!」

悠麻ちゃんも叫びました。

私たちの叫び声も届かず、シザーの両刃は閉じられました。瞬間、私は目を閉じました。

ジヨキツ！と鈍い音が聞こえました。

私は恐ろしさのあまり、そのまま顔をあげることができませんでした。

「完成だ!!!」

桜子さんが勝ち誇ったように言いました。

バディーズ フォーエバー！！

続
く

「さあ、それでは乾杯といきましょうか」

テーブルの上には、赤白ワインとワイングラスが3つ。

オードブル皿にはチーズや、ナッツ類。ポテトチップに、サラダに、天ぷら、蕎麦、里芋とイカの煮たやつなど、様々なものが並びました。

料理の得意な桜子さんが、あり合わせのもので、パーティーの準備をしてくれたのです。

桜子さんがワイングラスに、赤ワインをドボドボと満たしました。私たちはそれぞれに、ワイングラスを持ち、高く掲げました。

隊長の悠麻ちゃんが言いました。

「バディーズ フォーエバー!!!」

「バディーズ フォーエバー!!!」

「バディーズ フォーエバー!!!」

私と桜子さんも、後に続いて言いました。

グラスは3人の真ん中で、飛沫を上げてぶつかり合いました。

これぞ、究極のアート!

目の前に貼り付けられたサイケでシュールなオブジェからは、最早血生臭い匂いは消え去っていました。私たちは自分たちの作り上げた作品の前で、乾杯をしました。達成感に満ち溢れていました。こんなに美味しいワインを味わったのは、人生最初で最後のような気がしました。

「う、うまい！戦の後の飯はうまい！」

育ち盛りの悠麻ちゃんは、桜子さんの作ってくれた料理を、バクバク食べました。その姿は、超ミニスカから太腿を丸出しにし、時々パンチラで男どもを挑発する世間一般の工口女子高生の姿とは、余りにも遠くかけ離れておりました。悠麻ちゃんの背後には、戦国時代の高貴な武将が重なって見えました。

「さすが、30才も年下の男の心を捕らえるだけのことはあるよ。こんなに短い時間で、これだけのご馳走をあっという間に作っちゃうなんて、尊敬しちゃうなあ、俺」

悠麻ちゃんが言いました。

「26才よ！」

桜子さんが怒ったように言いました。

「ふんっ、大して変わらねえ」

「なにうおー！」

「でも、桜子さん、これからもまだまだイケますよ」

私はふたりの間に入って言いました。

「あら、そう？まだまだイケる？」

桜子さんは私に顔を近づけてきて、嬉しそうな笑顔を浮かべました。

「え、ええ・・・いけますとも・・・」

しかし、間近で見ると、凄まじいものがありましたので、私は顔をそむけてしまいました。

その時です。

「うっぷ！！！！なんじゃ、こりゃあ????」

天ぷらを食べていた、悠麻ちゃんが突然顔をしかめました。

「チクワの天ぷらよ」

桜子さんは平然と言いました。

「チクワ？」

「そ、そうよ」

「まっず！固ってえ！・・・ペツ！！」

悠麻ちゃんは、口の中のものを吐き出しました。そして、手の平に載せたものを見て、大きな目を見開きました。

「ぐわっ！チクワなんかじゃねえよ！」

悠麻ちゃんは席を立ち、台所へ駆け込み、流しの中に吐き出しました。

「ぐおらあー！！！！、桜子っ！！」

口をすすぎ、台所から戻ってきた悠麻ちゃんは、いきなり桜子さんの胸倉を掴んだのです。

「ご、めんなさい。許して！許してえ・・・」

桜子さんは、畳の上に手をつけて謝りました。

「許さん！」

「ごめんなさい。陰干にして、秘宝として一生持っていようと思ったの。だって、一時は私のアソコに入った愛しいあの人の大切なアレですもの・・・。でも、やっぱり引きずるのは辛いわ。辛すぎる。わかってよ、この気持ち。みんなだって、みんなだって、一時は憧れたものでしょ？」

「ねーよ！」

悠麻ちゃんが言った。

桜子さんは助けを求めるように、私を振り返りました。

桜子さんと私のアソコに入ったアレ。ソレを今、悠麻ちゃんが食

べた。

考えただけでも、気分が悪くなりました。身体中を悪寒が走りま
した。

「とにかく、ひきずりたくはなかったの……。で、でも、いいわ。
いいわよ。私が全部処理するわよ。すればいいんでしょ！ぐわっ！
！！」

桜子さんはそう言うと、皿の上に残ったチクワの天ぷらを両手で
掴み、一気に口の中に放り込みました。

吐き気がしました。

もう、他の料理にも手をつける気がしなくなりました。我慢でき
ずに桜子さんに背を向けました。

何気に隣室の方に目をやりますと……。あれ？何か足りない。
足りないものはなんだったっけ……。私は一生懸命思い出そう
としました。

そうです。足りないものはタマミでした。

ソファの上で手足を縛られ、黒い網タイにガードルを履いたSM
嬢タマミの姿が消えていたです。

「タマミがない」

私は言いました。

みんながソファの方を振り向きました。

「いつから、いなかった？」

悠麻ちゃんが言いました。

「まったく、モグッ、気がつかなかったわ。ングッ」

桜子さんは口を膨らまたまま言いました。なかなか噛み切れない
ようでした。

「私も作品造りに夢中になっていたから、気が付かなかった・・・」
私は悠麻ちゃんの顔をうかがいました。
「俺もだ。まったく、気が付かなかった」

私たち3人は、暫くじつと考え込んでいました。

その時です。

ガガガガガガガガガガア！！！！！！！！

道路工事のような、激しい轟音が聞こえて来ました。見るとひろ
りんを貼り付けた、壁が振動していました。

壁に亀裂が入り、中から何やらギザギザした金属製のものが、飛
び出してきました。

ズガガガガガガガガガガ！！！！！！

チエーン・ソーでした。

チエーン・ソーは壁を突き破り、バリバリと壁を壊していきまし
た。

ズバツ！！！！

人型に切られた壁が剥がれ落ちました。壁の中から、チエーン・
ソーを持った何者かが、勢い良く飛び出して来ました。紛れもない

S M嬢タマミでした。

私たちは同時に身の危険を感じ、急いで、その場から逃げました。

S M嬢タマミは無表情のまま、チェーン・ソーを振り回し、私たちの方に向かってきます。

私たち3人は這ったまま、キッチンのテーブルの下に逃げ込みました。タマミはテーブルの前までやって来て、チェーン・ソーを振り上げました。

ウーーーーーンスズガガガガガガガガガガ！！！！！！

そして真中から切りつけて行きます。テーブルが、バリバリ刻まれていきました。テーブルの下はもう危険です。私たちはバラバラにテーブルから転がり出ました。

私の足元に、チェーンソーが振り下ろされました。私は素早く回転して身を交わしました。チェーンソーは床に突き刺さりました。タマミが引き抜いている間に、私は冷蔵庫の陰に隠れました。悠麻ちゃんは、キッチンの流し台の中に逃げ込みました。

チェーンソーを引き抜くと、タマミは、逃げ場を探している桜子さんに向かって行きました。

桜子さんはとっさに椅子を盾に抵抗しましたが、椅子は簡単に切り裂かれました。チェーンソーの歯は回転したまま、盾を失った桜子さんの首あたりに水平に構えられました。

私は恐怖のため顔を覆ってしまいました。

「ぎゃあーーーー！！！！！！！！！！」

バディーズ フォーエバー！！

バリッ！バリッ！ズガガガガガア・・・

この世のものとは思えぬ悲鳴と同時に、異様な音がしました。恐る恐る片目を開けて覗いて見ますと、桜子さんが血を流して床の上に倒れていました。周囲には細かい肉片が飛び散っています。

S M嬢タマミはチエーン・ソーを持ったまま、リビングの方へと戻って行きました。

「さ、桜子さー！ー！ん！ー！！」

悠麻ちゃんが冷蔵庫の陰から這い出してきて、桜子さんの上に取
りすがって叫びました。桜子さんはピクリともしませんでした。首
のまわりには血の海が広がっていました。

私は恐ろしくて、ただ身体中ガクガク震わせているだけでした。

それからタマミはひろりに近づいて行くと、ひろりを貼り付
けにしている壁に刺さった3本の矢をチェーン・ソーで、バリバリ
とぶち切りました。

支えを失ったひろりは、壁からゴロンと床に落ちました。

今度はタマミは、ガーターベルトに差してあったムチを引き抜き、
床の上に転がったひろりんに向かって、ビュツツと、ひと振りしま
した。びくともしませんでした。当然です。すでに息絶えているの
ですから。

タマミは何度も何度も、ひろりんをムチ打ちました。

するとどうでしょう。死んだはずのひろりんが、立ち上がったで
はないですか。いったい……。

「グゲツグゲ……ゲロゲロゲエ！！」

ひろりんは、口からどろどろした緑色の液体を吐きました。

私と悠麻ちゃんが呆然と、その成り行きを見ている中、タマミは
ひろりんを肩に担ぎ上げました。右手にはチェーン・ソー、左肩に
はひろりん。

そしてタマミは、人型に裂けた壁の隙間から、悠然と立ち去って

行ったのです。

「グ・・・グオ・ノウ・ラミハ・・・ラサデオ・グベギグアア・グ
ツツゲロゲログツバイ・マタンキュー・・・」

立ち去る瞬間、ひろりんはタマミの肩の上でこっちを睨み、緑色の液体を吐きながら、何やら呪文めいた言葉を残して行きました。

一瞬の出来事でした。

私と悠麻ちゃんは、呆然とその場に立ち尽くしました。

暫くして我に帰った私たちは、血の海の中で倒れている桜子さんの名前を何度も呼びました。

「桜子さー！ーん！！死んじゃだめだよ。バディーだろう？」

悠麻ちゃんの眼には、涙が溢れていました。大きな涙の粒がぼたぼたと落ちました。

「桜子さー！ーん！！！」

私も桜子さんの名前を呼びました。

悠麻ちゃんが桜子さんの身体を抱き起こし、しっかりと抱き締めました。

その身体に首はありませんでした。

私は、恐る恐る桜子さんの背中側に回りました。

なんと言うことでしょう。

桜子さんの頭はチェーン・ソーで首を切断され、皮一枚で繋がっていた頭が後ろにぶら下がっていたのです。

頸椎や食道、気道がぶつとりと切断され、かろうじて首の後ろの皮一枚で繋がっていたのです。当然呼吸も心臓も停止していました。悠麻ちゃんは、そのまま静かにまた桜子さんを寝かしてあげました。

私たちは仲間を失った悔しさと哀しさで、いつチェイン・ソーを喰らせて戻って来るかも知れぬ、SM嬢タマミの恐怖に怯えながらも、暫くは立つこともできず、泣きくずれていました。

何時間そうしていたことでしょう。

悠麻ちゃんが、突然、身体を起こして言いました。

「生き返ったんだよ。ヤツは・・・」

「うん・・・」

「なんで？」

「一旦は死んだ・・・」

「でも、確かにアイツ自分で起き上がったよ」

「うん。間違いない。私も見た」

賢い悠麻ちゃんは暫く黙ったまま、じっと何かを考えている様子でした。

私には今日起こった全てのことが夢のようで、何も考えることはできませんでした。

「ペス・・・」

悠麻ちゃんが言いました。

「はっ？」

「ペスだ！ペス」

悠麻ちゃんは突然立ち上がり、ペスの元へ歩いて行きました。ペスはガスレンジの上に置かれた鍋の中で、既に息絶えておりました。

「ペス・・・」

悠麻ちゃんがペスに呼びかけると、ペスの尻尾が動いたのです。ペスは死んではいなかった。

悠麻ちゃんはペスを抱き上げ、桜子さんの元へ連れてきました。ペスは嬉しそうに尻尾を振り、桜子さん身体の上に載せられました。

悠麻ちゃんは、通学バッグの中から、熊谷の駅で買った御家宝の残りを持ってくると、細かくちぎり桜子さんの太腿にそれを塗りつけたのです。

御家宝はペスの大好物です。ペスは喜んで桜子さんの太腿にへばり付いた御家宝の粉をペロペロと舐めました。

「噛め！」

悠麻ちゃんが号令をかけました。すると、ペスは「ううう・・・」と唸り、桜子さんの太腿にガブリと噛み付いたのです。

そして、太腿に付いた御家宝の粉を全てなめ尽くすと、力尽き、また桜子さんに寄り添い死んだように眠ったのです。

ところがなんと驚いたことに、それから、数分も経たない内に桜子さんの両手の指がピクピクと小刻みに動きはじめたのです。

続いて、両足もガクガク動きはじめました。

そして、両目を大きく開けたのです。その眼は真っ赤に充血しておりました。右目の下は硫酸でケロイド状になり、片耳は落ち、青黒い恐ろしい形相でした。まるで、ゾンビのようでした。いえ、一

旦那死んだ桜子さんはゾンビとして生き返ったのです。足元にゾンビ犬を従えて。

桜子さんは自力で起き上がろうとしました。上体を起こしましたが、頭がガクンと後ろに折れました。

桜子さんの背中側にいた私には、頭が逆さになってぶら下がっているのが見えました。桜子さんは私と眼が合いニコツツと笑いました。私はぞつとしました。しかし、友好的な笑顔でしたのでホッとしました。

「仕方ない、取り合えず間に合わせに貼り付けておこう」

悠麻ちゃんがガムテープを持ってきて、桜子さんの首にぐるぐる巻きにし、私はそこに成人式で使ったダチヨウの羽のシヨールの切れ端を巻いてやりました。

「ぐっがるるるる……」

ゾンビ桜子は、もう、うまくしゃべる事はできませんでしたが、そう言って嬉しそうに、にっこり微笑みました。

「桜子さんもゾンビ桜子として生き返った。そして、私たちには強い見方ゾンビ犬ペスがいる。三人と一匹。もう何も怖いものはない！」

隊長が言いました。

私たちはグラスにワインを注ぎ、改めて強い結束の乾杯をしたのです。

「バディーズ フォーエバー!!!」

バディーズ フォーエバー！！

「バディーズ フォーエバー！！」

「バディーズ フォーエバー！！」

「バウ・・・ワウ・・・」

桜子さんの、首に巻いたガムテープの隙間から、飲み込んだ赤いワインがだらだらと染み出していました。

「奴らをこのままにはしておけないだろう・・・」

賢い悠麻ちゃんは、また何か新たな策を考えているようでした。

第1話【熊谷の戦い】

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4992b/>

バディーズ フォーエバー！！

2008年11月7日08時12分発行